

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2017年1月7日

文責：JUN

あけまして おめでとう ございます。 本年も よろしく お願いします。

すべての子どもの学びのために

「先生は、どのような視点で授業や授業の中の子どもをみておられるのですか？」

ある日の学校訪問で、その学校の一人の教師がこうわたしに尋ねました。わたしにはそれに答えて語る時間は十分にありました。でも、この質問に直接答えることをしませんでした。一言で答えられることではないように思え、自分は特定の視点を意識して授業を観ていないと直感的に思ったからです。

その教師がどのような思いでこの質問をしたのかは、そこまでの話の流れからわかっていました。彼は、わたしがどう子どもをみているかを尋ねてはいるのだけれど、本当は自分がどのような視点で子どもの学びをみればよいか知りたかったのです。一般的に、どう発問すればよいか、どうグループ学習をさせればよいかと性急に指導法を求める傾向があるなか、この彼の考え方は歓迎すべきものでした。この教師の思いに答えなければいけない、わたしは強くそう思いました。それでも言葉にすることはできませんでした。

あれから時間が経過しました。その間、何かのときにひょいとこのときのことが頭をよぎりました。あのとき、わたしはどうあの教師に答えればよかったのだろう、そして、わたしがいちばん大切にしていることは何だったのだろう、それこそが語るべきことであるはずだから、それはどういうことだったのだろう、そう考えました。そして、浮かび上がりました。それが本号の表題である「すべての子どもの学び」ということだったのです。わたしは、どんな授業を観るときでも「すべての子どもの学び」をみていたのです。

1 すべての子どもの学びに向き合う

授業をみるときはわたしは複雑なことで頭をいっぱいにしていないわけでは無いのです。シンプルに「すべての子どもみる」、それだけなのです。それはわたしの授業観と同じです。授業をするときも「すべての子どもをみる」ことに徹していました。

一人ひとりへの思いが深くなければ、一人ひとりへの視線がやさしさと深さを有していなければ、一人残らずすべての子どもに目を向けていなければ、どの子どもも夢中になれる授業はできない、それは教師としてのいろいろな経験を通じて到達したわたしの心構えでした。当たり前のことです。

も、その当たり前を実践することこそが本物なのではないでしょうか。今、質問をしてくれた教師が目の前にいたら、迷いなく次のように言うでしょう。

「すべての子どもをみることです。あの子ども、この子どもと、どの子どものこともみつめることです。耳を傾けることです。それぞれの子どもの存在に向き合うことです。急がず、強引にならず、さまざまなアンテナをすべてオンにして向き合うことです。そうしたら必ずみえるようになります。感じられるようになります。」と。

すべての子どもと言うからには、理解するのに時間のかかる子ども、落ち着いて学習することが難しい子ども、しゃべりたくてたまらない子ども、逆に寡黙な子ども、せっかちな子ども、のんびりした子ども、と、実にさまざまな子どもすべてに対応しなければならないということになります。ときには、深刻な家庭状況を有している子どもがいることもあります。過去に問題行動を起こした子どもがいることもあります。子どもとの人間関係が壊れるという痛切な経験をしてきた学級を担任することもあります。何人もの子どもを「引き受ける」ということは、そういうさまざまな状況をすべて「引き受ける」ということです。教師は、その覚悟をして子どもたちに向き合わなければなりません。

もちろんそれは簡単なことではありません。一人の教師で背負い切れないほどの重みをもつものです。一人の人間でできることはたかが知れています。だから、子どもの状況すべてに完璧に対応するなどということはできるはずがありません。でも、その子どもに毎日接して、何らかの対応ができるのはその学級を預かっている教師である自分しかいないのです。その覚悟をし、自覚をもって子どもを見つめ、子どもの言葉に耳を傾けたとき、みえるものはみえ、聴こえるものは聴こえてくるでしょう。精神論のような言い方をしますが、そういう対し方をしない限り、すべての子どもの学びに向き合うことはできないのです。

2 安易な模倣のもつ危険性

人は、他者の模倣をしながら成長します。赤ん坊として生まれたその瞬間から模倣は始まります。そして、人は、その人生を通じて繰り返し繰り返し数限りない模倣を実行します。模倣は人の成長にとってかけがえのない行為なのです。

このように考えると、模倣ほど大切なものはないことがわかります。ところが、その大切な模倣がすべてよいことばかりかと言うと、そうではないケースが数えきれないほどあることはだれもが感じていることでしょう。つまり、人は、どういう模倣をどのように行うかで、それぞれの人格なり、生き方なり、技量なりが決まってくるのだと言えます。

当然、教師の授業にも同じことが言えます。わたし自身のことを振り返っても、教師になったときから、先輩教師などの模倣を繰り返してきたことに間違いはありません。模倣をしなければ授業者として成長できなかったし、教師として全うすることもできなかったでしょう。

わたしは、教師がぐんと成長するのは次の二つのケースしかないと考えています。一つは、強い憧れを抱いたときです。あのようにになりたい、あのような授業をしたい、そういう願いを強く抱いたとき、そのための苦勞を厭わなくなります。そしてもう一つのケースは、全くその逆で、深い挫折を味わったときです。このままではだめだと思い自己嫌悪感を抱くまでに落ち込み、それでもなんとかしなければと思ったとき、人は信じられないほどの力を出します。憧れと挫折、そのときの思いの強さ、

願いの強さ、教師という仕事への責任感の強さ、そして、目の前の子どもたちへの思い入れの深さが、自らを成長させてくれるのです。そういうときに行う模倣は、形だけまねる安易なものとは質的に違います。すぐに実現しないことはわかっている、模倣しようとしていることの奥深さもわかっている、苦勞することもわかっている、それでもその実現に向かおう、そうしなければいけない、そういう覚悟のようなものが、本質的な方向に向かわせてくれるのです。

「学びの共同体」の授業には、指導過程とか授業展開などに定まった方式があるわけではありません。定まった指導過程に当て嵌めて行う授業はだれにでもできるものになるでしょうが、そういうものほど似ても似つかないものを生み出します。授業は、何人もの子どもを対象に、子どもや状況の異なりに応じてその場その場で判断しながら行う創造的な行為です。そういうものがマニュアルのような形に当て嵌めてできるはずがありません。人を対象とする教育ほど形に当て嵌めることを排除しなければならぬものなのではないでしょうか。

しかし、その教育の世界にも、安易な模倣がはびこっているのです。良心的で熱心な教師でさえも、この危険性と無縁ではないのではないのでしょうか。

「学びの共同体」に取り組む学校も、結果を出すことを急ぐと、いつの間にか安易な模倣をすることになります。ペアやグループを授業に取り入れればそれだけで子どもの学びが深まるわけではないのです。机をコの字に並べただけで子どもが学び合えるわけではないのです。「わからないと言える学級にしよう」と呼びかけただけですべての子どもの学びが保障できるわけではないのです。「聴くことが大切だから、しっかり聴きましょう」と促すだけで聴き合える子どもになるわけではないのです。「ジャンプの課題」を提示するだけで子どもの探究が生まれるわけではないのです。

もちろん、これらのことは「学びの共同体」で大切だと言われていることばかりです。「はいと返事をして椅子を机の下に入れて発言しましょう」「手を膝の上に置いて聞きましょう」などという形式的な学習規律とは質が異なります。それでも、こういうことを取り入れるだけでは、「学びの共同体」の学校が目指しているものはすがたを現さないのです。もっと大切なものが抜け落ちているからです。それがないところでどれだけ模倣しても、子どもの学びはよくなっていかないのです。

3 ケアし合うつながりを築かないと

もっと大切なもの、それは、すべての子どもに学びに向かう意欲が満ちているということです。その意欲がどこから生まれ出るのでしょうか。それは、その教室に築かれている人と人とのつながりが生み出すのではないのでしょうか。つまり、この「つながり」が深められていくような毎日の営みのなされていない学級では、どれだけ手立てを尽くしても、授業を工夫しても、子どもの学びへの意欲は高まらず、学びも深まらないのです。

この「学級の人と人とのつながり」の鍵を握っているのは、当然のことですが、教師です。人と人との微妙な関係に気づかない教師の教室には、子どもの良質なつながりは決して生まれません。子どもは教師の背中を見て育ちます。教師が行うこと、話すこと、それらが子どもの言動の価値観を決め、道標になります。

そして、この「人と人とのつながり」のもっとも重要なものが「ケア対応」なのです。

何かがわからなくなったとき、どうしてよいかわからなくなったとき、「これ、どういうことなの？」

「ねえ、ここからどうすればいいの？」と訊くことができる「つながり」があったら、どの子どもにも学ぶ意欲が生まれるでしょう。すべての子どもが「わかるようになりたい」「できるようにしたい」と前向きに取り組むようになるでしょう。けれども、そういうSOSは、どれだけ「尋ねていいんだよ」「友だちを頼っていいんだよ」と教師が言ってもがそれだけで出せるものではありません。それほど、「わからないこと」「できないこと」は子どもにとってうれしくないものなのです。

そのうれしくないことを心から歓迎し、「わからなさこそ宝物」と語り、すべての子どもをみつめ、すべての子どもの言葉に耳を傾け、なんでもない「わからなさ」から感動的な学びを生み出す授業をやってみせたら、「わからなさ」を出すことは恥ずかしいことではなくなります。

教師は、子どもの「わからなさ」に敏感でなければいけません。わからない子ども、できない子ども心の痛みを感じ取れなければいけません。課題を出したら、難しそうにしている子ども、間違いに陥っている子どもがどの子どもか、そして、その子どものわからなさや間違いはどのようなものなのかに気づけなければいけません。そういう「感性」のない教師であってはなりません。

もちろん、その一方で、想定以上の素晴らしい考えが生まれることもあるのでそういうことにも気づけなければなりません。その素晴らしい考えが、これまで学習に困難を抱えていた子どもから出てくることもあるわけで、もしそれが生まれていたらなんとしても気づかなければなりません。きっとそれは感動的な出来事になるはずですから。

つまり、教師こそが、「ケア対応」が必要な子どもをいち早く見つけ出し、その子どもへのかかわりを、自然体で、あたり前のように行わなければならないのです。子どもたちは、そういう教師の一挙一動を見て、「わからないこと」「間違ってしまったこと」がどんなに宝物なのかを悟り、その「わからなさ」に向かって取り組む仲間を尊重するようになり、自分もまたわからないことがあったら仲間尋ねて取り組もうと考えるようになるのです。

「ケアし合う関係」は、子どもに平等意識をもたらします。早くできることだけがよいことではなく、むしろわからなさにねばり強く立ち向かう仲間のことを感心して見つめる心が芽生えます。それは、相手の「今」を、相手の「状況」を、違いを超えて尊重する心の持ち方です。そこから、互いに恵みを受容し合う「互恵的な関係」を生み出せることになります。

それがないところでは、どれだけペアやグループを入れても、素晴らしい課題を提示しても、子どもの学びは深まらないし、子どもたちの何かに「共同体意識」は育ちません。

繰り返しますが、教師が子どもへの「ケア対応」をできているかどうか、しかも、その「眼差し」をすべての子どもに向けているかどうか、それがもっとも根本的なことなのです。

冒頭、わたしは、「すべての子どもの学び」を見つめるように授業を観ていると述べました。その視線をいま子どもたちと向き合っている教師の皆さんに持ってもらいたいと強く思います。授業の方法よりも、やり方よりも、子どもの事実をみつめることに、しかも「ケアの眼差し」で見つめることに心を砕いてもらいたいと思います。子どもたちはその眼差しに対して応えてくれると思うからです。そうなったとき、わたしに質問をした教師がみえるようになりたい「子どもの事実」は、きっと子どものほうからやってくるようになるでしょう。

2017年になりました。本年が、皆さんの教室に「ケアし合うつながり」が築かれますように祈っています。